

京町家の本
其ノ弐



二十一世紀の今、

なぜこれほど

京町家が良いとされるのか？

人は京町家の

何に魅かれるのか？

巷に溢れる

レトロ、アンティーケ、ヴィンテージ。

人は古いものに何を求めるのか？

古き良き時代の情景？

省エネルギーのありがたみ？

日本人であることの原点回帰？

明確な答えはわからずとも、

京町家を紐解けば

そのわけは心に響くだろう。

それは一千年の時をかけ、

人々が造り上げた今だから。



受け継がれる町並み

幕末の混乱に起った元治元年の大火で市中の大半を焼失した京都。明治維新ののち、国の中枢が東京へ遷ることにより、人口が流出し産業も衰退の方向へ向かいつありました。しかしそんな暗雲を払拭すべく、一千年の都は急速に近代化の道を辿ります。明治十八年には琵琶湖疏水の開削が始まり、5年後には蹴上に造られた水力発電所が送電を始めます。明治三十八年には第四回内国勧業博覧会を誘致。加えて「平安遷都千百年記念祭」と共同開催され、記念事業として平安神宮が創建されました。古の都から近代都市として再興をかけた大事業なのでした。さらに明治末期から大正初期にかけて行われた三大事業（第二琵琶湖疏水の建設、それを利用した上下水道の整備、道路拡張および市電敷設）により、都市基盤の整備が進みます。市電の开通とともに、番組小学校制など、全国に先駆けて取り組む事業も数多くありました。

現存する京町家と言われる伝統木造家屋は、幕末の大火灾後に再建されたものがほとんどであり、多くが大正～昭和初期（終戦頃）に建てられたものです。京町家も明治の初め頃までは江戸時代の流れを組んでいたようですが、急速な文明の発達と文化の西洋化に導かれ、庶民の住宅も多様化する傾向が出てきます。江戸時代中期に形成されたという、天井の低い厨子二階から天井高のある縦二階べ、二階開口部の虫籠窓はガラス窓に変わり、また、西洋の洋館を模した部屋が造られるようになります。大正九年、「市街地建築物法」が施行されたことにより、徐々に、基礎や土台を設け、筋交いを採用するなど、古来より伝承されてきた建築手法が変化し始めます。昭和の初め頃になると建築技術の進化とともに材料も多様化。それで主流であった木製の格子に替わり、腰高に壁を設け、すりガラスや真鍮・アルミなど金属性のパイプの格子が取り付けらるような町家が次々と生まれます。

また、近代化に欠かせない電気・ガス・水道の発達に伴い、おくどさん（竈）や通り庭はその役目を失い、徐々にキッチンや炊飯器にとって替わられその姿を消していきました。終戦の後、昭和三十年に「建築基準法」が制定されると、現行法の基準に合致しない伝統的建築手法「木造伝統軸組構法」による建築が不可能になり、京町家は既存不適格建築物として位置づけられることになりました。

戦後の復興から目覚ましい発展を遂げる日本。高度経済成長の波は京都にも押し寄せ、市街地の建物は高層化が進み、多くの京町家が取り壊されてしまします。平成に入るとバブルの勢いが京町家の減少に拍車をかけます。高層マンションの建設が進み、より一層多くの京町家が姿を消し、町並みが急速に変貌していきました。

刻々と変わりゆく京都の町並み。京町家が次々とマンションや駐車場に姿を変える様子を危惧し、京町家と町並みの保存に声を上げる市民団体が出現。平成十年には、京都市は京町家の減少に歯止めをかける施策の立案に取り掛ります。平成二十年には「景観法」の施行をきっかけに京都市は、全国に先駆けて景観条例を發布。特に高層化が進んでいた中心部にも厳しい建築規制が敷かれることになりました。平成二十年～二十二年に京都市が実施した町づくり調査では、市域に残存する京町家はおよそ47000軒であったことが報告されています。

今や京都は十七の世界遺産を抱える、日本を代表する観光都市となりました。然しながら、いわゆる有名観光地だけが京都の景観であるのではなく、平安京より脈々と受け継がれてきた町並みがあつてこそその京都の景観であるのです。未来に向けてこの伝統ある町並みを守るのは、現代を生きる私たちの使命なのです。



「ケ」と「ハレ」町家の暮らし

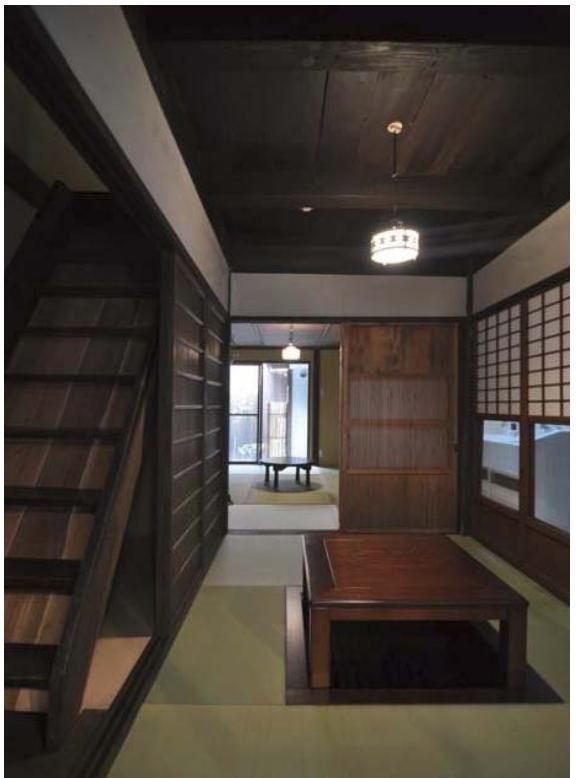


表は商売・商談など接客の場
奥へ進むほど私的意味合いが強くなり、訪問者（入りの酒屋や米屋など）は
ダイドコの手前から声をかけ、家人から返事があれば中に入ることが出来た。

人々の暮らしに寄りそつてきた京の町家を紐解いてみると、そこには思いがけず理にかなった暮らしがあることがわかります。平安京が造られて以来、都として人口が集中し必然的に住居が密集、特に秀吉の時代以降は平安京の区画割りをベースに効率よく住居を建てるため、間口を狭く奥に深い、いわゆる「ウナギの寝床」の地形が形成されたのです。

通りに平行して、奥へ3室又は4室並ぶ京の町家は、とても機能性に優れています。日常的には、表に面している「ミセの間」から次の「ゲンカン」までは、店や商談のスペース、つまり接客の場として使われます。そして次に続くのが家族の食卓であり団欒の場となる「ダイドコ」「ザシキ」。つまり、奥へ入れば入るほどプライベートの意味合いが強くなるということなのです。

日常を「ケ」とするなら、祭事が行われる非日常は「ハレ」。昔は、年中行事はもちろん、冠婚葬祭も自宅で行うのが常がありました。実は取り外しができる格子をとっぱらい、襖など部屋を隔てる建具も外し、奥の座敷まで一続きに部屋を開放するのです。京都の一大行事、祇園祭の宵山の3日間、鉢町の町家では、格子を取り外して家宝の屏風をミセノマに飾り、往来の人々に披露する習わしがあります（屏風祭）。また、8月下旬に行われる地蔵盆でもミセノマを開放して町内のお地蔵様を祀り子供の為の祭りが行われてきました。このように京町家は、職と住、ケとハレの使い分けがされた機能的な住居がありました。



姿を変える「ハシリ」

「ハシリ」とは、通り庭の中ほどを占める炊事場のこと。明治維新以降、文明は急速に発達しますが、庶民の台所に近代化の波が及ぶのは戦後になってから。明治・大正の頃までは、土間では直に桶が置かれ、窯で火をおこし、調理はしゃがみこんで行うものであります。土間では直に桶が置かれ、窯で火をおこし、調理はしゃがみこんで行うものであります。土間では直に桶が置かれ、窓で火をした。上下水道の整備がされると、立つまま調理ができる流し台が登場します。それに伴い部屋と分離されたハシリは使い勝手が悪いとされ、土間に床が貼られ、おくどさんの替わりにガスコンロが置かれるようになりました。流し台もステンレスが登場するまでは、研ぎ出しお石造りやタイル貼りのものが主流でした。上部に広がる火袋はやがて無用の空間となり、閉じられて用途に応じて居室や納戸に姿を変えていました。生活の中心であつたハシリは近代化とともに大きくその姿を変ることになりました。



季節とともに

「家のつくりようは、夏をむねとすべし」と徒然草の中で兼好法師が記したように、湿度の高い日本の気候において、平安の頃すでに、人の住処は夏の暑さを考慮して造られていた。特に盆地のせいで蒸し暑がたまらない京都の夏は、日中をいかに涼しく過ごすかが大きな命題である。盆地という地理的要因に加え、帝の御座す都として栄え人口が集中し、必然的に住処が密集した。このように密集した状況では、採光も通風も良いとは言えない。だからこそ京の人々は、いかにこの暑さをしのぐか、長い年月をかけて考えてきたのだ。夏になると襖や障子を外して御簾や草戸など夏用の建具に替え、直射日光が注ぐと簾を垂らし、軒先には風鈴を吊るし涼しげな音に耳を傾けた。庭に水を打つことにより起きる気圧差で奥から表まで風が通り抜けの原理も知っていた。京町家には体感で五感で、快適に過ごすための仕掛けがあちこちに散りばめられているのである。

逆に冬についてはとんと疎い。京都の冬の寒さは「底冷え」と言われるよう、足元から体の芯が冷えるような寒さである。表から奥まで貫く通り庭の連続した上間空間、たてつけの悪い建具の間から隙間風が入り込む。とにかく「寒い」のだ。さすがに火を扱う炊事場＝ハシリは、少なくとも調理後は温もりが留まっていたらう。しかし、京の底冷えはからはその程度では逃れられない。昔の暖房器具はと言うと、火鉢とせいぜい炬燵程度。冬の寒さは、重ね着をして、家族がひとところに集まり耐えしのぐものであった。今でこそエアコンや床暖房が私たちの暮らしを快適にしていることは当たり前だが、「しのぐ」暮らし当たり前であったのはほんの140年前のことである。



現代の住宅は、断熱材や合板で防備され、365日、冷暖房で温度管理される。密閉された箱の中で気温も気候もコントロールされているようだ。このような住宅が多い現代では、日々の暮らしの中で四季の移ろいを感じることが少なくなる。逆に木や土、畠の井草など自然物で造られる伝統家屋は、建物そのものが呼吸するかのように気候に応じて熱や湿気を調節し、小さくても庭が光と風の通り道をつくり、雨や風の音を耳にして外界と緩やかに繋がる、それが京町家である。庭先から聴こえてくる虫の声に秋の訪れを感じ、家のあらゆるところから容赦なく入り込む隙間風に冬の訪れを感じ、漂う花の香りで春の訪れを感じた。建物そのものも、そこに暮らす人も日々、四季の移ろいを身近に感じ、暑さや寒さを実感し、季節に合わせて暮らす。なんてことのない、日本人が昔から身につけてきた暮らし方なのだ。現代の整った快適な住環境とは、季節の感じ方そのものが異なるのである。

だからと言って、昔の暮らしの方が良いというわけではない。人間の進化による科学技術の発達なのだから、その技術でもって、伝統家屋の造りを尊重し、その性質に合わせて現代設備を効果的に取り入れることができれば良いのだ。つまりは建物と気温をコントロールするのではなく、建物と気候と上手に付き合い暮らすということなのである。暑いなり、寒いなりに、季節に寄りそう暮らしができるのも京町家の醍醐味であり、多くの人を惹きつける魅力の一つである。現代住宅と伝統家屋は相容れない面があることに違いは無いが、後世に町家の暮らしを受け継いでいくためには、二者の調和が不可欠であることは言うまでもない。



忍び返し（シノビガエシ）

京町家の下屋に取り付けられる、鋭利な金属や竹を扇状に広げたもの。その名から察する通り泥棒除けである。道に向かって平入りに建つ京町家は、建物の大小があるとは言え、連続した庇の上は泥棒にとっては格好の足場になっていた。そんな泥棒除けの発想から生まれたのが「忍び返し」。扇状に開いたものから、格子状に並ぶものまで形状はさまざま。



起り（ムクリ）

平入りに建ち並ぶ京町家の町並みが美しいという理由のひとつ。京町家を見上げると、その屋根が薄っすらと膨らみを帯びていることに気がつくだろう。この膨らみを「起り（むくり）」と呼ぶ。一説によると、京都に降る雨は横なぐりの激しい雨より、しとしと静かに降る雨が多く、雨水が緩やかなカーブに沿ってゆっくりと軒先に流れ落ちるようにする為とも言われている。この丸みを帯びた屋根が町並みを和らいだ表情にしてくれるのだ。



煙出し（ケムリダシ）

大きな商家の屋根の上にぽつんと付いている小屋根、これを「煙出し」と呼ぶ。煙出しは名前から察するように、炊事場の熱気や煙を外へ逃がすためのものである。つまり、煙出しの真下には通り庭と火袋があるということなのだ。さすがに真冬は冷気が入り込むため、開閉できる蓋がつけられているところもある。



卯建（ウダツ）

「うだつがあがらない」という言葉の元であるとも言われるように、繁盛していることの証であるとされる。隣家への延焼防止あるいは境界線の役目も持ち、その形は様々である。京都においてはその数は少なく、他府県では、愛媛の内子町、埼玉の川越などでは豪奢な卯建を目にすることができる。



大 戸 (オオド)

潜り戸 (モグリド)

便利で機能性に優れた玄関戸。

一見すると背丈より小さな引き戸で人ひとりが通れるぐらいの幅で出入りしにくいようだが、実は大きな秘密がある。小さい方は引き戸の「潜り戸」。潜り戸は「大戸」の一部であり、その大戸は全体が内側に開くのだ。大きな荷物の搬入、例えば酒樽や米俵などの運び込みにはお役立ちなのだ。しかし、夜は防犯の意味も込めて、大戸は閉め、家人は小さな潜り戸で出入りするのである。



バッタリ床几の上に蔀戸が付いている



平格子とバッタリ床几

バッタリ床几 (ショウギ)

蔀 戸 (シトミド)

バッタリ床几がこの世に登場するのはことのほか早く、室町時代の洛中を描く絵図にその姿が現われている。本来は「揚げ店（あげみせ）」と呼ばれ、商品を陳列して売るための棚であり、必要に応じて上げ下げして使われてきた。今でこそその姿を消しつつあるが、昭和の中頃までは夕方になると、バッタリ床几に腰かけ涼みをしたり、井戸端会議の場になったり、ご近所さんと将棋や囲碁を楽しむ社交の場でもあった。

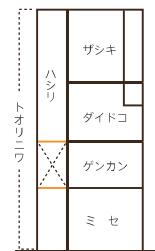
バッタリ床几の上には、さらに歴史を重ねた「蔀戸（シトミド）」がまれについている。原始的な跳ね上げ式の開口部であり、雨戸の役割も持つ。古来より寺院建築で用いられ大きな寺社では今も目にできる。夜は降ろして閉じているが、日中は光を入れる為に跳ね上げ、軒下に打ちつけられた金物にひっかけておく。蔀戸がある町家はともすれば江戸時代遅くとも明治には建てられてたと言えるであろう。

=バッタリ床几のディティール=





中戸 (ナカド) 暖簾 (ノレン) 嫁隠し (ヨメカクシ)



間口狭く奥に長い京町家の出入口は大抵が一箇所。家人も、客人も、使用人も、お馴染みの酒屋に米屋、大工職人まで、同じ玄関から入りする。接客の場である店の間から奥へ進むほどプライベートの意味が強くなるため、一連の通り庭にも自然と境界が生まれてくる。その境界の一つが、ハシリへの入口「中戸」である。そして中戸を越えたとしても、水場の手前には「嫁隠し」と呼ばれる衝立がある。現代において言葉の聞こえは良くないが、通り庭の中では重要な役割を持つ。用向きの人はこの衝立の手前から家人に声をかけ、家の許可が出てから奥へ入ることができた。炊事場はプライベートな空間であり、神聖な空間でもある。ここから先は気安く入ってはいけないということを暗に示す境界なのである。



「中戸」にかけられる暖簾は、その先の足元が見えても気楽には入れない、緩やかな結界の役割を持つ。



「嫁隠し」は、その形状や高さは様々である。家人から声がかかるまで訪問者はこの衝立を越えることは許されなかった。

天井様式

京町家のみならず伝統的日本家屋においては、部屋の用途や格式によって天井の様式が異なる。京の町家においては、店の間・ダイドコは大和天井、奥の座敷は竿縁天井、茶室では網代天井が用いられる。



大和天井 (ヤマトテンジョウ)

2階の床板を「ササラ」と呼ばれる小梁で支え、天井裏を作らず構造部をそのまま天井にした状態。京町家においては、普段使いの店の間とダイドコで多く見られる。



竿縁天井 (サオヅチテンジョウ)

天井板に意匠として細い角材を付けた天井様式で、一般的には杉材や檜材が用いられる。京町家においては奥の間など座敷で多く見かけられる。



格天井 (ゴウテンジョウ)

格子状に桟を組んだ格天井は、天井様式の中でも格式の高いものとされる。最も格式高いと言われるのが、取りあいの部分にアーチを描かせる「折り上げ格天井」。特に寺院建築においては天井板に色とりどりの絵や模様が描かれた豪華なものもあり、日光東照宮の拝殿、二条城の大広間一の間などは特に有名。



網代天井 (アジロテンジョウ)

薄くそいだ竹を編み込んだものが網代。数寄屋建築では天井のみならず建具の意匠としてもにするが、京町家にも積極的に取り入れられ、茶室や座敷天井で見ることができる。

(チマキ) 祇園祭の粽



粽は粽でも食用ではない。祇園祭の宵山で手に入れることができる厄除けの粽である。共通して書かれる「蘇民将来子孫也」とは、八坂神社の牛頭大王が行き倒れた時に、自分たちの暮らしで精いっぱいの蘇民が助けてくれたことに感謝したという故事に由来するものだと言う。町家であろうがそうでなくともうが、祇園祭の宵山で買い求め、軒先に飾っている家は多い。



お地蔵様

京都の町のあちこちで見かける、お地蔵様。8月下旬に行われる「地蔵盆」は子どもの為のお祭りで、関西以西、特に京都では盛んに行われる。町家のミセノマを開放し、お地蔵様を祀り子供たちが輪になって数珠回しをする風習である。少子化の現代でもこの町単位のお祭りは脈々と守り継がれている。



消火器と消火バケツ

京の町中を歩いていると、たびたび目にするのが、町の名前が書かれた消火器と消火バケツ。防火の意識が高い京都の町中ではまだまだ玄関先に置かれている。



(ホーロー) 琺瑯の町名札

古き良き時代の産物の一つ、ホーロー製の町名札。全国にもホーロー製の町名札はあるが、京都は通り名が合わせて記されている。店や企業の広告を兼ね、中でも森下仁丹の大礼服を着た男性のマークは今でも愛好者が多く、新聞などでもたびたび話題に上る。右端は、今となっては存在しない地名「上京区下鴨松之木町」。下鴨という地域が、昭和4年に上京区から左京区へ編成される前のレアものである。



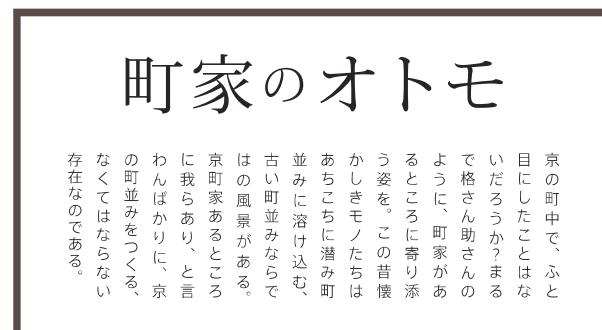
郵便受け

懐かしさを感じずにはいられない、レトロな文字が彫られている。大きな特徴は、今どきのボストとは違い、まさに「受け口」だということ。室内側には受け皿は無く、部屋の中に新聞や手紙がボトリと落ちる仕組みである。



町家のオトモ

京の町中で、ふと目にしたことはないだろうか? まるで格さん助さんのように、町家があちこちに満み町並みに溶け込む、う姿を。この昔懐かしきモノたちは、この町にあるところに寄り添う。古い町家あるところは、その風景がある。京町家あるところに我らあり、と言わんばかりに、京の町並みをつくる、京なくてはならない存在なのである。



持ち送り

軒下の梁を支えながら装飾を兼ねる金物。寺社では木製で意匠の凝ったものを目にすると、京町家で見かけるのは金物製。まさに軒下の力持ちである。



井戸

地下水脈が豊富な京都では、井戸のある家が多く古来より人々の生活用水の役割を果たしてきた。地下鉄網の発達とともに、今となっては実際に飲用できるものは数少なくなってしまった。



碍子 (ガイシ)

陶器製の絶縁体。配線方法や電線の絶縁性が向上したことにより住宅からはその姿を消していった。今では一般的な住宅において実際に使用されていることはないが、古い町家では軒下や天井を走る姿を見かける。





陰影の美



京町家の魅力の一つは？と尋ねられると
思い浮かぶもののひとつに「陰影の美」が
あげられる。日が暮れて、京格子の隙間か
らこぼれる光は、道に控え目な明るさと薄つ
すらした影を落とし、遠目から見るとぼん
やりした明るさがことのほか美しい。奥行
き深い家の中間に設けられた坪庭に、陽の
光に照らされる様は目に清々しく外界との
つながりすら感じさせる。近代日本文学史
にその名を残す谷崎潤一郎も、静寂のうち
に広がる美しさを「陰翳礼讃」で述べている。
光の取り込みが重視される現代の住宅と
は意を異にする陰影の美。そもそも密集し
たウナギの寝床であるのだから開口部を設
けることは難しく、左右からの光を期待す
ることはできない。しかしながら、照明器
具の無い時代、炊事場には天窓から手元に
光を落とし、もつと遡れば書きものをする
床の間の書院には、下地窓を設けて手元に
月明かりを求めた。つまり必要な分だけ明
かるさを求める、エネルギー消費の少な
いエコな造りが、陰影の美をもたらしてき
たとも言える。



伏見区にある重要景観建造物に指定されている京町家。(改修前の状態)

文政二年（1819年）の棟札が屋根裏に残っていたことから築190年強であることが判明した。

商家の名残りの幅広い通り庭には井戸があり、見上げると火袋の見事な準棟幕が広がる。

柱や梁は太い材が用いられているわけではないが、ほぼ1本で通されていることは京町家の特徴である。

京町家の造り

脈々と受け継がれた木造建築の基礎

伝統構法で造られる京町家は、現在主流である在来工法とは意を異にする。伝統構法は「一つ石」や「葛石」と呼ばれる基礎となる石の上に構造部が乗っているだけであり基礎と柱は繋結されていない。現代の鉄筋コンクリート造の基礎とは大きく異なる点である。加えて、垂直方向と水平方向の材で構成され、筋交いと呼ばれる斜材や、ボルトのような金物でがっちりと固めてしまうのではなく、材と材を材そものでつなぐ仕口や継手という高度な熟練の手仕事が求められる手法が用いられている。（※大正時代に市街地建築物法が施行されてからは、徐々に土台や筋交い、金物が取り入れられるようになるため、施行以後の町家にはそれらが取り入れられている例も見られる。）そして地震に対する考え方も異なる。揺れに対して筋交いや金物で固めることにより抵抗するのは在来工法。それに対して建物に柔軟性を持たせ、木材のめり込みや建物の揺れで地震力を吸収し、玉石に乗った柱が移動することで倒壊を防ぐ構造特性を持たせたのが伝統構法なのである。

平安京が誕生してからというもの、京都は長らく町づくりの手本であった。都に集まる武士や大名が得た知識を持ちかえり、それが地方で波及していく。そのため京都に似た町家建築が軒を連ねる町並みが全国各地に残る。しかしながらその地域特性や風土に合わせて造られたため、京町家とは造りや意匠が少しずつ異なる。豪雪地においては、冬場の積雪に建物が耐えられるよう構造部の材は大きく太いものが用いられ、火災の発生が多い地域では防火の観点から壁が漆喰で厚く塗り固められる蔵造りに発展した。原型である京町家はと言うと、使われる材は主に杉や桧であるが、比較的、華奢な材が使われていることに気がつく。特に表面から見えない部分は安価な材が使われていることが多い。都ならではの居住により“うなぎの寝床”と称されるような限られた敷地の中で住居を造るために、造り方にも材料にも工夫が必要であったと考えられる。加えて表だった贅沢を好まない、控え目な京都人の気質がこのようなところにも表れているのかもしれない。



基礎

現代の工法と決定的に異なる
京町家たる所以

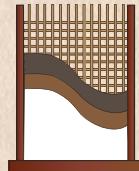


伝統工法が石場建てとも呼ばれる大きな理由。「一つ石（ひとついし）」や「葛石（かづらいし）」、これら基礎となる石の上に構造部が置かれているだけで、緊結されていない。現代の鉄筋コンクリートのような一体型の基礎とは大きく異なる点である。



壁

呼吸する
土・木・藁

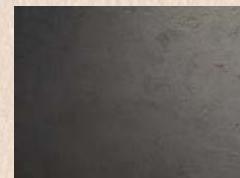


京町家の壁は竹と土と藁でできている。水と練った土に藁を混ぜてよく寝かせたものを、竹で組んだ下地に塗り込む。数度の重ね塗りを経て、仕上げには聚楽や漆喰など自然の素材を用いる。化学製品を用いない土は、吸湿効果が高く、気候に応じて湿気を出し入れする。また、壁が傷んだらこの土を練り直して補修に充てられる。

下地（竹小舞）



荒壁（中塗り）



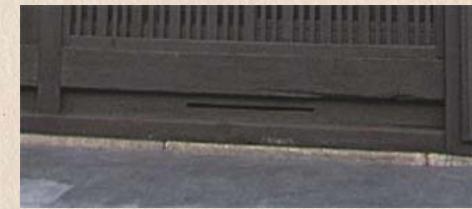
漆喰（仕上げ）



聚楽（仕上げ）



2階まで1本で通る柱を支える一つ石



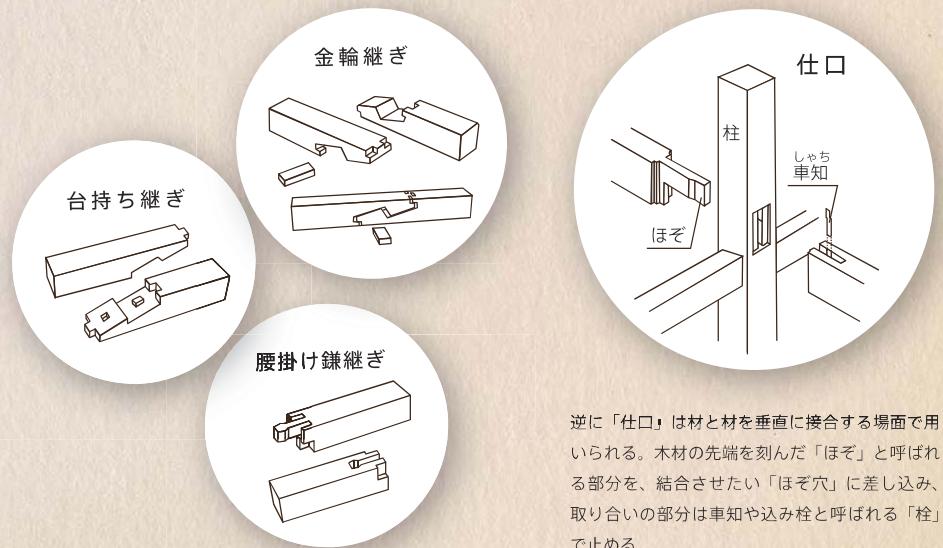
間口方向の加重を受ける「葛石」



床組みを構成する、大引きと束と束石



「仕口（しぐち）」と「継手（つぎて）」は、柱や梁の接続部において金物を用いず、二つの部材をつなぎとめる方法である。建築に限らず、家具など「指物（さしもの）」と呼ばれる木工の世界においては共通の伝統的手法と言える。材と材をこみ栓や車知などでつなぐものを「仕口」、断面同士を合わせつなぐものを「継手」という。「継手」は水平に接合したい部分に用いられる。接合部分の形状は様々で、施工部分に適した方法が用いられる。その種類は六十種類あると言われ、代表的なものには、腰掛け鎌継ぎ（こしかけかまつぎ）、金輪継ぎ（かなわつぎ）台持ち継ぎ（だいもちつぎ）などがある。



逆に「仕口」は材と材を垂直に接合する場面で用いられる。木材の先端を刻んだ「ほぞ」と呼ばれる部分を、結合させたい「ほぞ穴」に差し込み、取り合いの部分は車知や込み栓と呼ばれる「栓」で止める。





京町家の本 其ノ式

作製・編集 株式会社八清

住所 京都市下京区東洞院通高辻
上ル高橋町 619

電話 (075) 341-6321

<http://www.hachise.jp>

京町家検定

京町家に関する歴史・意匠・建築・生活
の4分野から知識を問う検定試験。
平成十八年よりWEBで開始。

開催期間 年2回（初級編・上級編）

出題数 50問中 70%正解で合格

合格認定 合格認定書発行

鍾馗さんストラップ進呈

（※上級編合格者のみ）

主催 株式会社 八清



平成二十年から2年かけて行われた京都市の町づくり調査では、市内中心部及び近郊や街道沿いに残存する町家の数はおよそ四万七千戸という報告がなされました。しかしながらその中には、長く空家のままで住み手の不在により老朽化が進む建物が全体のおよそ5%存在するという調査結果が出ています。中には倒壊寸前の危険性を持ち早急な対処が求められているものがあることも事実です。

取り壊してしまうことは簡単です。しかしながら、年月を重ねた伝統の屋を同じように再建することは、現行の法律では困難です。そのような今だからこそ、世界に誇れる伝統の町並みが活き活きと輝き続けられるよう、私たちが知恵を出し合い未来に受け渡せる町づくりをする時にはかなりません。